

ウイスリー・堀君 のこと



野中 憲

人でにぎわっていた。日本人は私一人。カナダ在住日系人約三万七千人の大半はトロント、バンクーバーなどの英語圏に住みつき、仏語圏のモントリオールではあまり見かけないためだろうか。『日本人はフランス語が苦手だからね』と日本総領事館の大島領事が言った言葉を思い出した。『カナディアンロツク』の水割りを口にししながら、私は切り出した。

の。

『父を通して、名前ぐらいしか知らない。日本人の若い人々と話したこともないし、どんな国土、文化、社会の国なのか全然知らないんです』

— 祖父母の出身地は。

『オカヤマと聞いています。どんな町ですか』

— 日系人としてあなた自身がモントリオールで差別を受けたことはありませんか。

『全然ありません。敵意の目で見られたこともない。祖父母、父の時代は知りませんが……』

— 恋人は。

『アメリカ人です。結婚はどここの国の人でもないと思う』

夜が更けてきた。私たちは時間を忘れ

て語り続け、時には論争となって大声を上げていた。ウイスリー君はコンコーディア大学でアメリカ史を学び、卒業後、ボストンの統計事務所で一年間働いた。そしてモントリオールへ。実業家になることが夢だという。『偉大だった父に負けぬ実業家になりたい』と語るウイスリー君の柔和な目には並々ならぬ意志が潜んでいるようだった。『君が代』が奏でられても、『ボクはカナダ人だから』と立ち上からぬほどカナダ人に徹しきる。

彼の父、『ドクター堀氏』は正に偉大だった。この三世を語るのに、どうしても不可欠な人物である。堀博士は幼少の頃、父母に手を引かれ、バンクーバーに日系移民として渡ってきた。昭和初期と聞く。バンクーバーのホテルでベルボーイをしながら苦学、プリティツシユ・コロンビア大学を卒業すると、シカゴ大学医学部へ留学した。バンクーバーに戻り、外科医を開業、その三、四年後に不幸な第二次世界大戦へと突入した。日系移民の多くがそうであったように、彼もまた収容所へ。戦後、モントリオールへ来て、自宅で開業していたが、やがてカナダ人医師ら百人をかかえるジョン・タロン病院の院長にまで出世した。『百万長者』、『日系カナダ人の誇り』、『立身出世伝中の人物』など様々に称讃され、多くの日系移民のよりどころとなった。熱心なカトリック信者でもあった彼は、貧しい日系老人に薬屋を開業させてやったことから、『医師法違反』としてケベック州政府にやり玉にあげられ、医師免許を奪われた。カナダ最高裁まで争ったが、敗訴。悲嘆に暮れた彼は、一九六五年、ニューヨークへ去った。苦学十年、彼は遂にアメリカ

で医師免許を獲得した。不転の努力、再起である。今、彼は六十一歳。ハーバード大学医学部の助教授であり、ケンブリッジ市立病院の医師として健在である。巨富の生活からどん底生活へ、そして名譽ある地位へ、彼の人生は波乱万丈そのものだった。ウイスリー君は少年の目で、この実の父の姿を見つめながら育った。『何故、父はモントリオールを追われたのか』— 小さな胸で考え続けた毎日だったという。

その『偉大な父』が、モントリオールを去ってから実に十一年ぶりに、わが子のもとにこっそりと姿を見せた。オリンピック競技が中盤にさしかかった昨年七月下旬のある日のことである。父はわが子が立派に成長し、レストラン・マネージャーとして生活を支えている姿を見て涙を流した。苦難の日々の思い出が甦ってきたのだろうか、父はわが子を何度抱き締め、わが子が差し出すステーキの味をかみしめた。『ドクター堀帰る』の報は、だれにも知らされなかった。父は二世としての過去を胸に、子は三世として現在の生きがいを胸に、父と子だけの短い再会であった。

ウイスリー君は語る。『ボク、モントリオールに永住する。日の丸も美しいがカエテの国旗もまたすばらしい。このカナダの大地でずっと成功してみせる。そしていつの日か、祖父母、そして父の国ニッポンを訪れてみたい』と。カナダの若者として、どっしりと草原に座った姿が、そこにあった。

(共同通信前モントリオール特派員)